

# 經濟研究

第7卷 第1號

January 1956

Vol. 7 No. 1

## ケネーの經濟循環論について

横山 正彦

重商主義時代の經濟論者においては、經濟現象がただ個別的部分的にのみ——たとえば外國貿易・貨幣流通・利子・奢侈などについてそれぞれ隔絶的に——分析されたにすぎなかったが、重農主義理論の創始者ケネーにおいて、はじめて、經濟過程が總體的に把握されるにいたったことは、すでに周知のとおりである。重商主義時代の經濟論者においても、個別的な分析においてはきわめてシャープなものも見出されるのであるが、しかし、かれらには、個別的認識から全體的總合的認識を獲得し、一個の體系をつくりあげるに必要な、統一的な觀點というものが缺けていた。他の言葉でいえば、かれらにはそもそも經濟理論なるものが缺如していたのである。いま、認識對象をそのすべての側面にわたって矛盾なく説明することのできる體系こそが科學であるとするならば、ケネーの重農主義こそは、まさに體系的な科學の名にふさわしいものであった。ケネーは、經濟過程の相互依存性・相互規定性を明らかにしようとして、その場合、人間の意思や意識からは獨立に作用する、經濟の自然史的な(naturgeschichtlich)發展過程を反映するところの客觀的な法則こそがまさに問題であることを發見し、そのような法則を

定式化しようと企圖したのであった。ケネーは、經濟循環(再生産過程)という重要な抽象にまで到達し、すべての生産行爲と消費行爲とが、たんに技術的にだけでなく、また經濟的にも、すべて結果として、同時にまた原因として、相互規定的な關係にあることを認識した。ケネーによるこの經濟循環(再生産過程)の認識こそは、重農主義理論におけるいくたの不備・缺陷にもかかわらず、經濟科學の建設にとってまことに巨大な意義をもつものであり、その發展のまさに礎石たるものであった。

ケネーの「經濟表」の出發點は、周知のように、總收穫、つまり、「經濟表」のいちばん上部に示されている年々の土地生産物からなる總生産物であった。生産期間の出發點をなすものが、このように、前年の收穫となっていたということは、マルクスもいっているように、<sup>1)</sup>まさに、「當面の目的にとって適切な」(sachgemäss)ことであった。なぜか？

農業においては、本來、收穫から收穫までの計算がおこなわれ、農業資本の循環としては、總收

1) Marx, K., *Theorien über den Mehrwert*, herausg. von Kautsky, Bd. I, 1923, S. 86.

穫、すなわち總生産物——ケネーの言葉でいえば、それは、「前拂」(avances)の「回収」(reprises)と「純生産物」(produit net)との兩者を含むものであった——がその出發點として現われる。すなわち、 $W \cdots W'$  (商品資本の循環)の形態である。この $W \cdots W'$ の形態が、まさにケネーの「經濟表」の基礎をなすものであった。ところで、この $W \cdots W'$ という形態においては、商品生産物總體の消費が、資本の循環そのものの順當な進行の條件として前提されている。個人的消費と生産的消費とを包括した消費の總體が、 $W'$ の循環の條件をなしている。 $W \cdots W'$ という循環形態は、最初から生産的消費と個人的消費との兩者を含み、したがってまた、この循環形態こそが、その運動を最初から「産業資本の總運動」として示す唯一の循環の形態である。<sup>2)</sup>この $W \cdots W'$ という運動においては、總生産物 $W'$ の各價值部分(不變資本價值・可變資本價值・剩餘價值)がどうなるかということ、すなわち、その實現(市場における販賣)が證明されなければならないのであって、まさにこのことによって、社會的再生産の諸條件の認識が可能となってくるのである。くりかえしていえば、この運動においては、總再生産過程は、本來、資本の再生産過程そのものとともに、また、流通によって媒介される消費過程をも含んでいるのである。ケネーの「經濟表」の基礎となったものは、まさにこの $W \cdots W'$ の循環形態であって、そこにケネーの見解の卓越性をみとめたのが、ほかならぬかのマルクスであった。<sup>3)</sup>

ケネーの「經濟表」は、一定の價值をもった國民的生産の年生産物の同一規模での再生産、すなわち單純再生産《tous les ans une reproduction de la valeur de cinq milliards》<sup>4)</sup>の進行を示したものであるが、單純再生産は、その本質上、消費(實現・市場)をその目標として有するものである。<sup>5)</sup>個々の資本家の立場からは、剩餘價值の獲

得がその推進的動機として現われるのではあるが。

ところで、このような消費の問題が、古代あるいは中世におけるように倫理的ないし政治的な觀點からとり扱われるのではなく、本質的に經濟的な觀點から考察されるようになったのは、17世紀の終りごろであり、消費の問題が生産との連關において、しかも國內市場の觀點からとりあげられるようになったのは、18世紀前半にはいつてからであり、さらに、それが經濟循環=再生産過程の不可欠な一契機として認識されるにいたったのは、18世紀半ば以後のことである。

重商主義時代の經濟論者は、ながい間、生産を自覺することなしに、主として財貨の流通だけをとりあげ、また、かなりながい間、たとえ生産について論議をかさねても、その生産が消費によって制約されていることは認識できなかった。消費の問題が本格的にとりあげられてきたのは、ようやく重商主義の解體期にはいつてからであった。重商主義時代には、消費の問題はまず、「奢侈」(luxury)の觀點からとりあげられた。初期の文獻には、奢侈、すなわち無價值なる消費にたいする反對の言説が非常に多く見出されるが、それらは、消費にたいする理解が當時いかに不十分なものであったかをよく示している。<sup>6)</sup>消費の問題は、さらに、商品の國外販路(外國市場)の觀點からとりあげられた。販路の確實性がなければそもそも生産は行われえないというところから、たとえば Thomas Mun<sup>7)</sup>は、イギリス商品の生産者が、生産にさいして、販路の可能性を考慮し、販路の擴張につとめるよう要請していた。この場合、Munは、まったく個々の商人的立場から發言していたのであって、しかもただ國外販路の點だけが語られていたのである。そのほか、たとえば Josiah Child<sup>8)</sup>などにおいても見られるように、

6) Cf. Schacht, H., *Der theoretische Gehalt des englischen Merkantilismus*, 1900, S. 94.

7) *England's Treasure by Foreign Trade*, 1664. この書のかかれたのは、Munの生前1628年前後と推定されている。

8) *Brief Observations concerning Trade and the Interest of Money*, 1668. この書はタイトルをのちに *A New Discourse of Trade* とあらためて、1690年に再刊されている。

2) Marx, K., *Das Kapital*, herausg. von Adoratskij, Bd. II, 1933, SS. 89, 93.

3) Marx, *Das Kapital*, op. cit., S. 95.

4) Quesnay, *Analyse du Tableau économique*, *Oeuvres* éd. par A. Oncken, p. 309.

5) Marx, *Das Kapital*, op. cit., S. 415.

要するに、當時は、なによりもまず生産と販賣の問題が前面におし出されていたのであって、消費の問題はけっして前面に出てはいなかった。William Petty<sup>9)</sup>において、はじめてわれわれは消費にたいする理解を見出す。Petty はすでに、生産と消費との間の連關を見ていたのであるが、このような Petty の見方は、當時としてはむしろ孤立的なものであった。かの John Locke<sup>10)</sup>ですら、消費の概念にはけっして論及していないのである。<sup>11)</sup>

17世紀末から18世紀初頭にかけてうちつづいた長年にわたる西歐諸國間の戦争の経験をへて、一つの轉換が生じた。イギリス商品の國外販路關係の大きな變化にともなうて、需要の問題が、國民經濟的なモメントとしてより一般的な形でとりあげられるようになった。この場合まず、Charles Davenant<sup>12)</sup>がわれわれの目に映ずる。Davenant は、もはや國外の販路事情についていちいちくわしい検討をほどこすということだけにとどまらないで、すすんで、需要の概念を一般化することを試みている。ここではじめて、人間の欲望あるいは需要というものが、すべての經濟の推進的動機として、また基礎として指摘された。しかし、Davenant は、まだその考え方を擴充してしあげるというまでにはいたらなかった。<sup>13)</sup>

18世紀にはいると、かの Bernard de Mandeville<sup>14)</sup>によって欲望あるいは需要の國民經濟にたいする役割の問題が前面に押し出され、經濟理論にとって一つの重要な基礎がすえられた。經濟學の分野で Mandeville のはたしたもっとも重

要な役割は、かれの奢侈辯護論であった。それは、當時おこなわれていた二つの見解に對應するものとして二つの側面をもっていた。一つは、奢侈を惡徳とし、その反對の節儉を美德としていた見解にたいして、Mandeville が、「國民的節儉」(National Frugality)を否定し、「奢侈」を辯護したものであった。《Luxury not Destructive to the Wealth of a Nation》<sup>15)</sup>もう一つは、奢侈は、人人を墮落させ、その資産を蕩盡させることによって、經濟的に危険なものであるという信念に反對して、Mandeville が、奢侈は偉大な國家とは切り離せないものであるばかりでなく、實に國家を偉大ならしめるに必要なものであると論じ、奢侈を辯護したものであった。<sup>16)</sup>ところで、Mandeville の奢侈辯護論は、外國商品にたいする奢侈の是認と自國商品にたいする奢侈の是認・獎勵——それはともに National Frugality の否定に照應するものであった——とを含んでいたが、とくに後者すなわち Domestic Luxury (國內市場)が、前者すなわち Foreign Luxury (外國市場)よりも重視されていた點が、われわれの論題に關連して注目されるのである。<sup>17)</sup>しかも、Mandeville が『蜂の寓話』のなかで、<sup>18)</sup>「奢侈は百萬の貧者に仕事を與え、忌わしき鼻持ちならぬ傲慢が、もう百萬人を雇うとき、羨望さえも、そして虚榮心もまた、みな産業の奉仕者である」とうたい、人間のもろもろの欲望=奢侈が、「商賣動かす肝腎の車輪となる」と説いているとき、それは、かれのいう「王様の偉い大臣方」や「偉い名士」たち、すなわち、まさに地主階級に屬する人々の消費が資本の蓄積に寄與するものであることを意味していた點が、のちに見るようなケネーの論述にいたる經濟學史上の一階梯を示すものとして、とくに注意されなければならない。

以上のような、Mandeville において見られた

9) *Political Arithmetick*, 1690. この書のかかれたのは、1671—76年ごろと推定されている。

10) *Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest and Raising the Value of Money*, 1691. この書の大部分はすでに1670年にかかれていた。

11) Schacht, *op. cit.*, SS. 94—95.

12) *Discourses on the Public Revenues and on Trade*, 1698.

13) Schacht., *op. cit.*, SS. 28, 96.

14) *The Grumbling Hive: or, Knaves Turn'd Honest*, 1705. *The Fable of the Bees: or, Private Vices, Publick Benefits*, 1714. Cf. Schacht, *op. cit.* SS. 27, 96.

15) *The Fable of the Bees* (1714) の Part I. の目次から。F. B. Kaye's edition, vol II, 1924, p. 390.

16) Kaye, vol. I, Introduction, p. xciv.

17) 田中敏弘「マンデヴィルの奢侈論」(『經濟學論究』昭和29年、第8巻第2號)、参照。

18) 上田辰之助譯による。

國內市場重視論あるいは地主階級の消費を資本蓄積のモメントなりとする議論の方向は、*British Merchant* 誌および Daniel Defoe によってさらに一段と押し進められた。*British Merchant* 誌<sup>19)</sup>は、「わが國の商業を維持する最良の方法は、わが本國の農産物および製造品のために最良の市場を維持すべきことを唱道するにある。イギリスにとっての第一にしてかつ最良の市場は、イギリスの居住者たちである。……國外市場は全部合せても、わが國內市場の六分の一はおろか二十分の一にも匹敵しえない。したがって……やはりわが國自體の消費、すなわち、わが國自身の人民の消費が、わが國の農産物および製造品の最良かつ最大の市場だということになる。したがって、この市場の維持と擴充こそ主要な關心事たるべきである」<sup>20)</sup>と述べている。このように *British Merchant* においては、自國內における消費、すなわち國內市場こそが、國民經濟の維持と擴大において眞に決定的なものとして重視されており、消費者したがってまた消費は、國民經濟のもっとも重要な要素とされていた。「地主は借地人から地代をうけ取るのだとただちに思いこみ、織物工は雇傭主たる織元から賃銀の支拂をうけるのだと思ひこんでいる。しかしこの兩方〔地代と賃銀〕とも支拂う者は消費者である。……人民の消費による以外には、兩者とも支拂われえないのである。」<sup>21)</sup> *British Merchant* のこのような理解が、18世紀半ばのフランスにおけるケネーの理解といかによく相通じていたかは、のちに見られるとおりでである。

さらに時代がすすんで、かの Defoe<sup>22)</sup>にいたる

19) *British Merchant* 誌については、Cf. Johnson, E. A. J., *Predecessors of Adam Smith*, 1937, pp. 141—157; Viner, J., *Studies in the Theory of International Trade*, 1937, pp. 116—118; Schacht, *op. cit.*, SS. 29—30. 大塚久雄「スペイン繼承戦役の經濟的背景」(『經濟學論集』昭和15年, 第10巻第8號, 66—96頁, 参照。

20) King, Ch., *British Merchant, or, Commerce Preserv'd in Three Volumes*, 1721, Vol. I, pp. 165—7. 譯文は、大塚久雄「18世紀初頭に於けるイギリス國內市場」(『社會經濟史學』昭和16年, 第11巻第2號, 81—88頁)による。

21) *British Merchant*, Vol. I, p. 166.

22) *The Compleat English Tradesman*, 1727; A

と、國民的消費の問題が、すべての國民經濟の中心點にすえられてくる。そして Defoe は、生産の増大はそれに照應する消費の増大なしには不可能であることを、斷言している。消費にかんする

Defoe の見解の精髓は、つぎの敘述のうちに明確にうかがうことができる。「土地の生産物を消費する人民の數を増加することは、一國民にとって、疑問の餘地のない、たしかな利益である。しかしその場合、それは、たんに食糧品を消費できるというだけでなく、それにたいしてまた支拂をなすことのできるような人民の増加が考えられているのである。というのは、乞食の増加は、trade の意味においては全然増加ではないのだから。人民のために雇傭を見出すという方法以外に、どのようにしてこのような〔意味での消費をなしうる〕人民の數が増加されるであろうか。」<sup>23)</sup>

上述の *British Merchant* (1721) 中の、「イギリスの貿易全般について」(*Of the Trade of England in general*) 考察した部分から John Smith<sup>24)</sup> がその要旨を抜萃し、そして、われわれがすでにうゑに引用した文章<sup>25)</sup>にたいして自己の見解を註釋としてつけ加えたつぎのような論述 (1747) は、のちにみるケネーの論議と關連して、きわめて注目すべきものであると思う。「わたしは問う。消費をつくり出すものはなにか、というよりもむしろ、その代價を支拂うものはなにか、と。〔それはつぎの兩者である〕地主の地代……と他のすべての人々の勞働〔以下すべて賃銀の意〕。これらの事物は緊密な循環關係をなしているので、どこから動きはじめるのかほとんどわからない。しかしながら、地主は他の人々がかれから離れては手にしえないようないくつかの生活必需品を自身の〔能力の〕うちにもっている、という點を考慮にいれると、この困難はすくなくも外觀上克服される。思うに、この事實は、社會における優越の

*Plan of the English Commerce*, 1728; *An Humble Proposal to the People of England*, etc., 1729.

23) Defoe, *Tradesman*, ch. XXXVII, zitiert von Schacht, *op. cit.*, S. 98.

24) *Chronicon Rusticum-Commerciale; or, Memoirs of Wool*, etc. 1747.

25) 註 21) の文章をさす。

地位を、すなわち、かれとこれを争おうとするような人々の存しないほどの優越の地位を、かれに與えるに十分である。當面の問題ないし事態についてみれば、地主が地代という形で手にいれたところの一部分を消費に用いるということは、容易に考えうるところである。しかし、思うに、労働にははるかに大きな役割を歸すべきであって、この労働は、〔地主以外の〕他の人々にとって地代に等置せらるべきものを創造し、そして労働者たるかれが同じようなふうに〔消費のために〕用いるところのものは、さらに一部は消費となり、また一部はより多量の、また他種の労働となっていく。かくして労働は、1年の循環のうちに、おそらく年々1千萬ポンドの本源的な地代からはじまって、波うちつつほぼ4千萬ポンドあるいはそれ以上の支出および消費にまでなっていく。……後者〔國內市場〕こそ十倍の労働を創出し、この労働が十倍の消費をつくり出し、あるいはむしろその代價を支拂い、國の収入を十倍に増加することは、明白である。……そしてこのことは、輸出のきわめてばく大な利益を輕視するものというべきではないが、しかしここで、*British Merchant*の意味するところをわれわれにより明白に理解せしめるであろう。そしてわたしはそれを解釋して、労働・消費・供給などの樞軸および發條 (great Wheel and main Spring) として土地所有者層 (Landed Interest) に嚴密な關心を拂うことが、妥當でありまた便宜である、というふうになしたのである。<sup>26)</sup>すではやく大塚久雄教授によって指摘されているように、John Smith においては、見られるように、國內市場の問題は、すすんで國民經濟の循環、すなわち再生産過程の契機として中樞的な重要性を與えられている。かれにおいては、國民經濟の循環（とくに擴大再生産）は、その起點を明白に國內市場（地代と賃銀）に、究極的には、購買力としての地代とその收得者たる地主の存在に求められている。この點が、のちにみるケネーの見解と關連して、特別にわれわれの關心をひく。

ここで、われわれは、ケネー以前のフランスの經濟論者で、消費の問題をとりあげている Boisguillebert,<sup>27)</sup> Melon,<sup>28)</sup> Montesquieu<sup>29)</sup> などとびこえ、<sup>30)</sup> われわれの論題にかんするケネー理論の眞實の意味での先驅者ということのできる Cantillon<sup>31)</sup> についてただちに見ることにしよう。Cantillon によれば、「一國において當然獨立しているのは、ただ地主だけである。そのほかの階級はすべて、企業家 (Entrepreneurs) であろうと被傭者であろうと、みな依存状態にあつて」(Chap. XIII) 「地主の費用によって生活し、あるいは富裕となる。」(Chap. XII) Cantillon は、消費一般の役割について論ずるということはしなかったが、まえに地主の經濟上の支配的地位を説いたことと照應して、「地主の氣質・流行・生活様式などが、一國の土地の用途を決定し、すべての物品の市價の變動をひきおこす」(Chap. XIV) と主張した。Cantillon はまた、經濟過程の循環的性格を指摘し、また、「一國のすべての交換と流通を指揮する」(Chap. XIII) ところの Entrepreneurs たる Fermiers の役割にも注意を拂った。Cantillon によれば、人口の半數(多くの地主を含む)は都市に居住し、残りの半數は田舎に住む。都市の住民は、年々の生産物の少くとも半分を、消費する。この半分のうちの三分の二は、地主からうけ取った貨幣所得によって購入され、残りの約三分の一は、都市の住民によって供給された財貨および勤勞と交換に農村の住民からうけ取った貨幣によって購入される。農業企業家としての fermiers は、地代として、年々の農業生産物の三分の一に等しい貨幣を地主に引き渡す。そして地主は、この貨幣を都市において消費する。fermiers

27) *Détail de la France sous le règne présent*, 1695; *Factum de la France*, 1706.

28) *Essai politique sur le commerce*, 1734.

29) *De l'esprit des lois*, 1748.

30) Cf. Spengler, J. J., *The Physiocrats and Say's Law of Markets*, I. in: *The Journal of Political Economy*, Vol. LIII, No. 3, Sep. 1945, pp. 194—5.

31) *Essai sur la nature du commerce en général*, 1755. この書は、Cantillon の生前 1725 年ごろかかれたものと推定されている。

26) John Smith, *op. cit.*, vol. II, pp. 111—112, footnote. 譯文は、大塚「18世紀初頭に於けるイギリス國內市場」同上、87—88頁による。

は、年々の生産物の三分の一を利潤として留保し、残りの三分の一を下僕や役畜を維持するために使用する。年々の農業生産物の少くとも六分の一は、fermiersの手から、直接または間接に、製造品と交換に都市の住民に引き渡される。<sup>32)</sup>以上が、生産的消費と個人的消費との両者を包括した、Cantillonの経済循環論=再生産論の内容であった。Cantillonにおいては、結局、すべてが、地主の支出如何——それが農業および工業における生産を決定する——に歸着することになっていた。地主の決定的な地位は、Cantillonにあっては、かれらが生産の剰餘をうけ取り、またかれらが、消費すなわち経済循環の起動者であるという点にあった。

以上のような経済學史的概観から、結局、われわれは、ケネー以前の経済論者にあつては——Cantillonをもふくめて——、本質的に循環的繼續的な経済過程の性格についてはまだ十分明確明快的な把握はなされず、したがってまた、一個のまとまった消費理論といえるようなものは存在しなかった、といわなければならないであろう。かくて、ケネーの経済循環論=再生産論が、「天才的な着想」(マルクス)と評されるゆえんである。

まず、ケネーによれば、一國の繁榮または貧困を判定する規準はけっして貿易差額のうちには見出されえないものであった。その眞實の状態を示すものは、一國の輸出状態ではなくて、國內における消費状態であった。國內の生産と消費が、外國貿易向けにほとんど残すところがなく、また外國貿易にたいする必要のないような大きさをもっている場合に、一國はもっとも繁榮状態にある、というのであった。<sup>33)</sup>このような、重商主義の貿易差額システムにたいするケネーの批判は、同時にまた、かれの國內市場重視論と関連したものであった。ケネーが自由貿易の主張者であったことはいふまでもないが、しかし、そのことは、ケネーが、外國貿易すなわち外國市場を國內商業すなわち國內市場よりも重要視していた、ということ

をただちに意味するものではない。むしろその反對であつた。ケネーにとっては、外國貿易は、すべての商業と同じように本來「不生産的な」(stérile)ものであつた。ケネーの考え方は、全體としては、むしろ、外國貿易の重要性を低く評價したものであつた。ケネーにとっては、外國貿易は、農産物の價格を維持するための「一つの必要な悪」(un mal nécessaire)にすぎないものであつた。「もし貿易を營まざるをえないとすれば、それは、このような國が、自國の土地生産物にたいして支拂いをなしうる消費者を十分もっていない證據であつて、そのためにかれらは、それを國外に販賣することを餘儀なくされるのである。……このような國民にとっては、外國貿易は、かれらの生産物の價值を維持し、その下落から生ずる最大の悪をさけるために、必要なまた不可缺ですらある悪である。」<sup>34)</sup>ケネーは、「一國民の富の状態を判断することのできるのは、國內商業と外國貿易によつて、とくに國內商業の状態によつてである。」<sup>35)</sup>「販路はつねに國內商業によつて十分保證されている。というのは、そこには消費したいだけ消費していない消費者に不足していないのであるから」<sup>36)</sup>と述べて、國內市場を外國市場よりも重視する意をはっきり表明しているのである。

ところで、このような國內市場重視論=尊重論を背景として、ケネーが、経済循環=再生産過程の理論的考察——すなわちブルジョア社會の抽象的考察——をおこなうにあつて、「經濟表」において外國市場を捨象したということは、かれのすぐれた理論的腕前を示すものであると同時に、かれの偉大な功績であつた。「一國民は外國に賣つただけしか外國から買うことができないのであるから、その支出の状態は、つねにその地域から年年再生するところの再生産(reproduction)に適應しなければならぬ。したがって、この支出の計算は、詳細なことは不確定で計算のできない、また追求することも無駄な、いっさいの外國貿易を捨象して(abstraction faite de tout com-

32) Cantillon, *Essai*, ed. by Henry Higgs, 1931, pp. 3, 43, 45, 121, 123, 125, 127.

33) Quesnay, *Grains, Oeuvres*, pp. 237—9.

34) Quesnay, *Du commerce, Oeuvres*, p. 483.

35) Quesnay, *Grains, Oeuvres*, p. 239.

36) Quesnay, *Du commerce, Oeuvres*, p. 465.

merce extérieur), この再生産そのものの定額にもとづいて規則正しくおこなうことができる。自由競争状態にある外國貿易にあつては、一方または他方の損も得もなく、等しい價值と價值との交換があるだけであるということに注意すればたりる。<sup>37)</sup>資本主義的生産というものは、總じて、外國貿易なしには存在できないものであるが、それは、資本主義の發展の具體的な諸條件にかんする「歴史的な問題」「歴史的性質のもの」(レーニン)であつて、資本主義社會における生産物の實現の問題を理論的に究明しようとする場合には、外國市場、外國貿易を考慮にいれる必要はまったくない。というのは、再生産論に、すなわち、實現の問題を理論的に究明する場合に、外國貿易をもちこむということは、ただ混亂を起させるだけで、問題そのものにとつても、その解決にとつても、あらたな契機をあたえるものではなく、問題を一國からいくつかの國へうつすことによつて、解決をおくらせるだけであるからである。

このように、ケネーは、經濟循環=再生産過程の考察において、生産物の實現を究明するにあつて、「正當にも」(マルクス)外國市場を捨象したのであつたが、それは、國民經濟の循環の起點を、購買力としての地代とその收得者たる地主の存在に求めたケネー自身における(「經濟表」(1758)における地主の地位を想え!)——それはまたかのJohn Smith (1747)においてもみられたところであつたが——、つぎのような論理を基盤とし、それにささえられたものであつた。「人口の増加は消費を擴大する。消費は、人間の欲望に比例して、すなわち人口の増加に比例して耕作によつて増殖されるところの農産物の價格を維持する。これら一連の伸張の端初は自國農産物の輸出である。というのは、外國への販賣は收入を増加し、收入の増加は人口を増大し、人口の増大は消費を擴張し、より大なる消費は、耕作を、土地の收入を、そして人口を、いよいよますます増大させるから。……ところで、これら一連の増加は、〔地代〕收入の増加をまはしてはじめて開始さ

れうるのである。これこそまさに根本的な點である。<sup>38)</sup>「人間の労働は消費と支出とを可能にするが、この二つのものは、それ自身、富のもう一つの源泉である。1 人人間がその收得〔賃銀〕からまたはその收入〔地代〕から支出するところのすべては、他の人間に利益を興え、そしてそれを生み出した、それを更新する源泉にかえる。1 人の農業經營者が百セティエの小麥を千六百リーヴルで賣つたとする。地主はこの千六百リーヴルを借地料としてうけとる。地主は、この金額を、農地の設營に使用する。かれがこの金額を分配した労働者は、それで食糧としての小麥を買う。かくて千六百リーヴルは、かれらに小麥を賣る農業經營者の手に還ってくる。この農業經營者は、他の小麥を生産するため、この金額を耕作に使用する。このようにして、地主の支出は労働者の收得〔賃銀〕を形成し、労働者は農業經營者が地主に支拂つた金額を農業經營者に返還する。もしこの金額が地主または労働者または農業經營者からとりあげられるならば、その循環は消滅する。……そのくり返される再生産、地主・労働者・農業經營者の支出は、停止する。<sup>39)</sup>

地代が「唯一の剩餘價值」(マルクス)として現われ、そしてその地代が經濟循環、とくにその擴大再生産の起點として設定されていたケネーの「經濟表」(1758)、したがつてまたかれの經濟循環論は、その本質において、資本がいまだ社會的労働を支配的には包攝しておらず(いいかえれば、資本主義的生産關係はいまだ從屬的ウクラードであつた)、封建的生産關係=土地所有が支配的ウクラードであつた、ケネー當時のフランス「社會の經濟的構造」(ökonomische Struktur der Gesellschaft)によつて規定されたものであつた、ということができるであろう。<sup>40)</sup>

38) Quesnay, 'Grains, Oeuvres', p. 207.

39) Quesnay, Hommes, *Revue d'Histoire des Doctrines économiques et sociales*, 1908, pp. 44—45.

40) 拙稿「ケネーの農業資本主義論とその歴史的意義(二)」(『經濟學論集』, 昭和30年, 第23卷第2號, 118—120頁参照。

37) Quesnay, *Analyse du Tableau économique, Oeuvres.*, p. 321.